

有志大名の蘭書貸借活動

——共有・互助・秘匿——

浅井 良亮

序

本稿は、有志大名の性格理解を射程に、彼らの蘭書貸借活動を検討する。それは、究極的には、有志大名とは何か、という問いに対する解となろう。ただし、それは次稿への宿題である。

有志大名の間で蘭書の貸与・借覧が盛んであったことは、既知の事柄である。徳川斉昭（水戸藩）や島津斉彬（薩摩藩）、伊達宗城（宇和島藩）などを素材に、嘉永六（一八五三）年以前に於ける個々人の横断的政治活動を論じる際に言及されてきた^①。また、有志大名群としては、彼らのネットワークを論じる素材とされてきた。例えば、

吉田昌彦氏は、有志大名が「海外情報・西欧知識・科学技術情報の交換を、一つの結節点としていた」ことを指摘し、一八四〇年代中葉から始まる「親藩・外様大名による政治集団」のグループ形成に情報収集・蘭書貸借が果たした役割を評価した^②。また、斉昭の蘭書貸借活動を分析した星山京子氏は、「徳川斉昭を中心として諸大名の間に对外情報、あるいは西洋学術の摂取を目的とした情報ネットワーク」が形成されており、斉昭が「ネットワークのリーダー的存在であった」と述べた^③。

一方で、近年には情報史研究が目覚ましい進展をみせており、大名の海外情報ネットワークが明らかとされている^④。蘭書貸借のネットワークと情報ネットワークは、共に相互補完的な役割を果たしていた。したがって、本

稿では蘭書貸借の在り方を素材とするが、ここで明らかとされることは、情報ネットワークの在り方に敷衍できよう。

ところで、一般的な情報収集活動に比して、蘭書貸借活動は実体を伴う。岩下氏が「情報ネットワークそのものは、情報、つまり史料の裏側にある、直接には目に見えないもので、これをとらえることはなかなか難しい」と吐露するように⁵⁾、情報は実体を捉えることが難しく、その分析もまた困難である。他方、蘭書は書籍体としての実体を有し、物理的にその動きを追跡することが可能である。どのような蘭書を求め、それを誰から入手し得たのか、そうした有志大名の志向性や需給関係を把握することが容易である。以上は、有志大名の関係性を理解する一助となろう。

なお、本稿で使用する「蘭書」という用語について、予め定義をしておく。近世を通じて海外から移入された書籍は蘭書と呼称されたが、その記載言語は多様であった。オランダ語やイギリス語などヨーロッパ系言語そのままの原書、清国で翻訳された漢訳本、移入後に翻訳された和解本、である。本稿で言及するように、和解本に

対する注目という点は留意が必要なものの、有志大名は、その言語の如何を問わず、広く輸入書籍を求めた。したがって、ここでは有志大名の行動に即して、その言語性を不問としたい。とするならば、図画類や雛形類も、これまた書籍同様に、海外情報を知り得る文物であった。これらにも着目すると、有志大名は書籍同様に貸借していたことが判明した。したがって、ここではその形態をも不問としたい。すなわち、本稿で言うところの「蘭書」とは、その言語や形態を問わず、広く海外情報や西洋知識をもたらす媒体、という程の意味である。

第一章 蘭書貸借の実態

ここでは、有志大名の間で展開された、蘭書貸借の実態を把握する。

一 情報収集

書籍の貸借を行う際、先達で必要となるのは、誰が如何なる書籍を所有しているのか、という所蔵情報である。それは、貸借関係を取り結ぶ相手を定める拠所となるの

みならず、自身が収集すべき書籍を取捨選択する判断基準ともなるからである。

有志大名は、この種の情報収集に殊の外熱心で、書翰などを通じて情報交換を頻りに行っていた。

【史料一】 弘化三年二月二〇日付島津斉彬書翰⁽⁶⁾

一 蘭書之儀未タ手二入兼申候、真田ニは四五部手二入候や二承候、陸地之アルチルレリー手二入候由、内々承り申候、私方ニはイキリス語ニて和解仕候字声綱目二冊、此間取入申候、此節珍敷書多、通詞持越申候由二御座候、委敷儀は承り不申候

右は、島津斉彬が徳川斉昭に対し、蘭書の入手を報じた書翰である。ここには、三つの情報を看取することができる。すなわち、①斉彬は「蘭書」を入手しかねているが「字声綱目」和解本を入手したこと、②真田幸貫（松代藩）が「陸地之アルチルレリー」などを入手したこと、③通詞が「珍敷書」を多く持参してきていること、である。差出人である斉彬自身の蘭書入手状況に加えて、真田や通詞といった第三者の蘭書情報が詳細に伝えられている。

当人の情報は、鍋島斉正（佐賀藩）が斉彬と「両三度

面会」した際に「蘭書等も不参よし」を伝えたように⁽⁷⁾、対面時に直接交わされることも屢々であった。こうして収集・蓄積された情報は、【史料一】の「内々承り申」という文言のように、情報源を明らかにしないかたちで他者に伝達された。

書翰による情報伝達は、情報の即時性という点で利便性が高く、情報伝達的手段として大いに利用された。しかし、その情報量は断片的なものになりがちで、情報の活用性という点では難があった。そこで有志大名は、時に一括した情報の交換を行った。それが、蘭書目録の交換である。

【史料二】（嘉永二年五月頃カ）島津斉彬書翰⁽⁸⁾

蘭書目録

ヒユウル・ウエルケン 一冊

ベキサンス・ボンベ・カノラン 一冊

エンゲルベルト・ベヘスチングス・キユンスト一冊

海岸防禦之書

ヒユキエニシリコセツテール・スコテン趨射法一冊

ヨンドルリフト・ウエーゲンスハット・シキート・

エンセイド・ゲヴェール煩礮手銃之訓練 一冊

メルキユス強国新書 一冊

当時伊達遠江守へ遣置候

ケルケウエーキ

フエルステルキングス・キユンスト 一冊

ビユスコロイド

ホウキユンジヘレル・キユルシユステテン・ケブ 一冊

ロイケ 二冊

デル・コーニンゲレーキ・ミルタイレ・アカデミー

右は、斉彬が斉昭に呈出した、蘭書目録である。斉彬が新規に入手した、蘭書九冊分の書名が列記されている。

そのうち、三冊については、内容を窺わせる文言が付書されている。例えば、「エンゲルベルト・ベヘスチングス

・キユンスト」とは、その表記から、Engelbert, J.M 著「Handboek der bevestigingskunst」1837のつとと推定する

ことができる。「築城技術のハンドブック」とでも訳すべき該書を、斉彬は「海岸防禦之書」として斉昭に紹介している。その書から如何なる知識を得ることができるのか、端的に紹介されている。

斉昭と斉彬は、こうした蘭書目録を定期的に交換し、互いの所蔵情報を具に伝達し合っていた。目録での情報

伝達は、情報の一括性という意味に於いて、書翰での伝達を遥かに凌駕していた。また、後述するが、斉昭はこの蘭書目録によつて借覧書籍の選定を行い、斉彬へ借用を依頼している。蘭書目録の活用性は極めて高かった。ところで、蘭書所蔵情報の媒介者は大名だけとは限らない。時に、蘭学者が情報の出所となることがあった。

【史料三】「訳業必要書籍目録」⁹⁾

○ボイス辞書 十冊

右ハ諸方貯藏家多有之候、分部若狹侯二屯部、不用之分此節有之候事と被存候

○ニイウエンホイス同 卷数忘却仕候、但シ

十五六冊と覚候

右ハ水越侯又巢鴨老侯二も有之候
○シヨメイル同 卷数式十冊計と覚候

諸家貯藏多と被存候、薩州公も必ス御藏書と被存候

○ウエイランド同 十冊

諸家藏書多と奉存候得共 屯部御注文之方可然と奉存候

○ミリタイレ。オールデンブック

右ハ兵家辞典ニ而、司天台ニ沓部、官蔵有之様
承リ居候、此分ハ是非御詔奉祈候

○独逸国辞書

貳冊

上巻ハ独逸辞本文、和蘭辞註文。下巻ハ和蘭辞
本文、独逸辞註文

○払朗西同

貳冊

上ニ準ス

右ハ小冊之分巢鴨老侯ニ有之筈、右ニ而も宜敷

○啖咭喇同

貳冊

右ハ翻訳相成候分、司天台ニ有之筈、又過年鈴
木春山も所蔵之處、同人物故後、箕作阮甫方へ
遣候由、但シ全備之ものニハ相見得不申候、沓
部原本御詔奉願候

右は、宇和島伊達家の庇護を受けていた高野長英が伊達宗城に提出した、蘭書目録の一部である。この目録は、その標題が示すように、翻訳にあたって必要性の高い蘭書二七冊の書誌情報を列記したものである。ここには、その書名・概要・冊数に加え、天文台や大名の所蔵情報が記されている。例えば、「ニイウエンホイス」辞書には、

「水越侯」こと水野忠邦（山形藩）や「巢鴨老侯」こと斉昭の所蔵が言及されている。また、「啖咭喇」辞書は、かつて鈴木春山が所蔵していたが同人の死去後に箕作阮甫の手に渡った、との伝聞情報が記載されている。

長英が提出した目録により、宗城は如何なる蘭書が大名間で多く所蔵されているのか、誰がどの蘭書を所蔵しているのか、そうした情報を知り得た。このことは、自身が如何なる蘭書を収集すべきであるか、という格好の判断材料になったであろう。

二 貸借依頼

書籍を貸借する場合、多くは閲覧希望者が所蔵者に対し、借用を依頼することから貸借が実施される。その際、先に収集された所蔵情報が活かしてくることになる。

【史料四】弘化二年一月七日島津斉彬書翰⁽¹⁰⁾

将亦此節イキリス、ブック之珍書御取入ニ相成候や
二外より承知仕候、若不苦義ニ御座候ハ、拝見之
義奉願候

右は、斉彬が斉昭に対し、蘭書の拝借を願った書翰である。斉彬が「外より承知」した斉昭の「珍書」入手情

報に基づき、その借用を依頼している。広く収集された所蔵情報、貸借関係を取り結ぶ相手を選定する材料となっていることが判る。

【史料五】（嘉永二年五月頃カ）徳川斉昭書翰⁽¹¹⁾

別紙蘭書目忝存候、右之内

ベキサンス・ボンベ・カノラン

右ハ下官方ニ有之候

ヒユールウエルケン

右原本ハ下官ニ御座候へ共、和解書ハ未所持不致候、

右之外ハ、原本並和解書未所持不致候故、ヒユール

ウエルケンを初、和解書御所持ニ候は、追々借覧

致度御頼申候、可相成ハ、ヒユキエニン云々、○ビ

ユスコロイド、○ランドルリフト云々、ヒユール・

ウエルケン等の中を先ニ借覧致度候

右は、斉昭が斉彬に対し、蘭書借用を求めた書翰である。冒頭の「別紙蘭書目忝存候」の文言から解るように、交換した蘭書目録【史料二】の情報に基づいて、借用が依頼されている。予め所蔵情報を交換しておいたことで、閲覧を希望する優先度までもが検討された上で、蘭書の借用が依頼されている。

このように、多くは相手の所蔵を把握した上で、借用依頼がなされた。しかし、時に事前の情報入手が得られず、相手に蔵書の有無を問い合わせる借用を願う事例もあった。

【史料六】弘化四年六月二日付伊達宗城書翰⁽¹²⁾

○レゲンメントエキセルシトインハントレイ

○アールドレイキムキユンデゼーハールトコープ
ハレデ

○マノーフルカファルレリイ

○ランドアルチルレリイ

右之書物、処々相尋候得共、何分無御座、最早奉仰

閣下外ハ無御座候、右等之儀奉願度、御請旁、恐

々謹言

右は、宗城が斉昭に対し、蘭書借用を願った書翰である。蘭書四冊の「御蔵収」有無を尋ね、所蔵していれば「御恩借」されたい、と依頼している。「処々相尋候得共」という文言からは、宗城が蘭書を求めて方々に依頼していたことが窺える。

ところで、有志大名の間では、時に貸与の申出がなされた。

【史料七】弘化二年一〇月一二日付島津斉彬書翰⁽¹³⁾

和解書二は一部海上炮術全書と申候、ゼー＝アルチル
レリー、天文台にて和解出来候品、極内分相頼、先
月末手二入申候、右御用二御座候ハ、入御覧候様
可仕候、他江は何卒御秘シ被下候様奉願候

右は、斉彬が斉昭に対し、「海上炮術全書」の入手を報
じた書翰である。入手を報じるだけでなく、「右御用二御
座候ハ、入御覧候様可仕候」と、その貸与を申し出て
いる。このことは、閲覧希望者が借用を依頼する、とい
う一方通行の貸借だけではなく、所蔵者が閲覧の是非を
尋ねて貸与を申し出る、という双方方向の貸借関係が成立
していたことを意味している。

三 写本作成

貸借された書籍は、閲覧されるだけには止まらず、屢
々複写が行われた。写本の作成である。

有志大名の蘭書貸借も、当然ながら、最大の目的は未
所有の蘭書を手に入れることであつた。したがって、借用
が実現した場合、その写本を作成することが専らであつ
た。

【史料八】嘉永元年一二月五日付伊達宗城書翰⁽¹⁴⁾

夷匪犯境録土金水三冊、段々延引仕、恐入奉存候、
漸々一昨日先方より差越候間、先ツ其僣差上申候、
御写被為済候ハ、被相下度奉存候、タクチーキ肥前
守より返却仕候ハ、可差出と奉存候、当夏入電覧
候蘭書一部、御用被為済候ハ、御下ヶ奉希候

右は、宗城が斉昭に対し、「夷匪犯境録」の貸与に応じ
た書翰である。「御写被為済候ハ、被相下度」の文言があ
るように、貸借は写本の作成を前提として行われており、
それは貸手側の宗城も了承した事項であつたことが窺え
る。

ところで、写本の作成は、新規の書籍に限られるもの
ではなかつた。時に、蔵収する蘭書の借用を依頼するこ
ともあつた。

【史料九】安政元年四月一五日付伊達宗城書翰⁽¹⁵⁾

扨右之書物ハ、両部共所持ハ仕居候得共、早率二書
写申付候間、誤字夥敷御坐候而、甚当惑仕候二付、
当秋、官庫之御書物拝借相願候所、不相下、甚残念
至極二付、何とか再願可仕含罷在候処、御恩借可被
成下旨重々願敷、以御庇蔭、一応校合仕候ハ、宿

願相届、無此上難有仕合奉存候、何卒御都合次第拝借被仰付度、伏而奉希候、書目左之通

海上砲術全書 ゼーアル之訳書

遠西火攻撰要 エルンスト之訳書

右は、宗城が斉昭に対し、蘭書借用を願ひ出た書翰である。冒頭に「右之書物ハ、両部共所持ハ仕居候」とあるように、かつて宗城は斉昭から両冊とも借用された過去があった。「海上砲術全書」については嘉永二（一八四九）年⁽¹⁶⁾、「遠西火攻撰要」こと「エルンスト」については嘉永四（一八五二）年に貸借が確認できる⁽¹⁷⁾。今回の借用目的は、かつて「早率二書写」したため、現状では「誤字夥敷」有様であり、「二応校合」を施すことにある。写本の誤植は、後にも触れるように、蘭書の活用に於いて大きな問題であった。これを解決する手段として、同一書目との校合が必要とされ、そのための借用がなされた。

四 返却

貸与された書籍は、当然ながら返却される。

借用の目的は概ね写本の作成にあつたので、返却も概ね写本が作成された後に行われた。例えば、弘化三（一

八四六）年四月に斉彬が斉昭に宛てた書翰では、「ロイテル伝長々拝借難有奉存候、写出来仕候間返上仕候」とあり⁽¹⁸⁾、「ロイテル伝」の写本作成完了によつて、返却が行われたことが判る。返却までの期間は、蘭書の分量により区々であるが、短いものでは数日、長いものでは一年程度と確認できる。

ところで、宗城は書籍の管理に杜撰な一面があつたように、斉昭などからは返却の督促を度々受けている。

【史料一〇】弘化三年六月八日付伊達宗城書翰⁽¹⁹⁾

フルステ・パンコク奉服

御別封御密翰謹而奉盥誦候、兼而奉願候御秘本三部御密借被仰付、重畳難有仕合御礼難尽于毫端奉存候、去月三日拝借仕、七日迄二而謹閲一過仕候処、何分其儘返納仕候儀残念千万奉存候二付、八日朝より一室二而密写仕居候末所勞二罷成、何分執筆不相叶、其後少々病勢退去仕候二付、強而松修理大夫方へ要用二付四五度罷越^{私取一条二付彼是密誤仕候故御座候}再発仕齒痛二相変、今日迄も難済仕居二付、十二日後密借も不仕フル之方半途二相成居二付、少々御猶予奉希上度候得共、余り延引罷成、其上昨夕返納之御沙汰御座候間、何とも

残念至極奉存候得共、固封返上仕候、私写懸も差置候而ハ半途綴立も不出来、取散し二而ハ不相濟候故、重々奉恐入候得共、差上置候間、后日又拝借奉希候節乍恐被遊御添被相下度希上候、尤禁忌御秘本二付一切口外不仕様被仰付、是ハ乍恐御安慮奉願候、決而如何様之儀御座候共漏泄不仕事に御座候

右は、宗城が斉昭に対し、返却遅延の謝意を伝えた書翰である。まず、斉昭から「昨夕返納之御沙汰」があったことが判る。返却遅延の理由として、宗城は「密写」が順調に進まなかったことを挙げ、「私写懸も差置候而ハ半途綴立も不出来」ため、機会を改めて拝借されたい、と願っている。

【史料一】嘉永元年一二月二日付伊達宗城書翰⁽²⁰⁾

蘭書の儀奉申上候処、右ハ全私不調法にて、当秋御下二相成、又直二脇方へ遣置候処、矢張差上置候様相覚、唐突之儀申上、奉恐入候、御海恕の程奉願候右は、宗城が斉昭に対し、陳謝した書翰である。この前段となる書翰【史料八】にて、宗城は斉昭に対し、「当夏入電覽候蘭書一部、御用被為濟候ハ、御下ヶ奉希候」と、蘭書の返却を求めている。ところが、その蘭書は「当

秋」既に返却されていたことが判明し、本書翰を以て謝意を伝えている。有志大名の人間的な側面が垣間見える事例である。

第二章 蘭書貸借の傾向

ここでは、作成した表をもとに、蘭書貸借の傾向を分析する。

予め断れば、表の作成にあたって典拠した史料は限定的である。したがって、ここで分析の母体とする貸借事例が、その全容ではないことは自明である。ともあれ、限定的な史料の中にも、総計五〇件の蘭書貸借を抽出することができた。その傾向を、時期・相手・内容の三点から、分析を試みる。

一 時期

始期は、弘化期に求められる。その背景の一つに、異国船来航の頻繁化が挙げられる。ビッドルの浦賀来航に代表されるように、弘化年間には西洋諸国が列島地域への接近を試みた。対外的緊張が昂揚すると同期して、大

表：有志大名の蘭書貸借

年月日	貸与	借覧	分類	書目名
弘2/11/頃	島津斉彬	有馬頼永	砲術	「セーニアルチルレリー」
/11/ 7	島津斉彬	徳川斉昭	不明	「スマルレンヒュルグ」5冊
			不明	「カステレイン」3冊
			砲術	「ヘルハンデリング」1冊
/12/頃	徳川斉昭	島津斉彬	その他	「蘭書」3部(「種樹書」など)
弘3/ 4/頃	徳川斉昭	島津斉彬	不明	「ロイテル和解書」
/ 4/26	島津斉彬	徳川斉昭	不明	「リュシヘルス之法」
/ 5/ 3			不明	「フルステ」
	徳川斉昭	伊達宗城	不明	「パン」
			不明	「コク」
/閏5/頃	島津斉彬	徳川斉昭	砲術	「炮術書」
/閏5/22	島津斉彬	徳川斉昭	砲術	「炮術書」続巻
/10/頃			兵法	「ベウセル著 軍卒手引書」
	鍋島斉正	伊達宗城	兵法	「シカルトホルスト著 袖珍兵書」
			兵法	「フオンテケル著 小戦記」
			砲術	「作者名ナシ 砲術 小冊」
			砲術	「セツフ著 石火矢等之重力を論る書」
/10/21	伊達宗城	徳川斉昭	情報	「蘭商船別段申上書面」
			情報	「輿地誌」(「坤輿図識捕集」)
/11/頃	徳川斉昭	島津斉彬	情報	「ロイテル船戦」
/11/12	島津斉彬	徳川斉昭	砲術	「海上炮術全書」
弘4/ 2/19			情報	「軍艦申出候漢地風説書」
	伊達宗城	徳川斉昭	その他	「絵図一枚」
			砲術	「大銃縮図三枚」
嘉1/ 5/頃	徳川斉昭	伊達宗城	情報	「御秘書」(「阿芙蓉彙聞」)
/ 6/頃	伊達宗城	徳川斉昭	兵法	「三兵活法」
			兵法	「二兵総説」
/ 9/頃	伊達宗城	徳川斉昭	情報	「夷匪犯境録二冊」
/ 9/11	伊達宗城	徳川斉昭	情報	「蘭人別段極密風説書」
/10/頃	伊達宗城	鍋島斉正	兵法	「タクチャーキ」
/11/ 5	伊達宗城	徳川斉昭	兵法	「練卒訓語八冊」
/12/ 5	伊達宗城	徳川斉昭	情報	「夷匪犯境録土金水三冊」
嘉2/ 2/頃	伊達宗城	徳川斉昭	船舶	「西洋船軍之画」
/ 3/25	徳川斉昭	伊達宗城	砲術	「アルチルレリー訳書」
/ 6/ 7	島津斉彬	徳川斉昭	砲術	「ヒュールウエルケン」
/ 9/ 5	島津斉彬	徳川斉昭	技術	「煩鉄之書」3冊
/12/頃	徳川斉昭	島津斉彬	その他	「イギリス図」
嘉3/ 5/21	島津斉彬	徳川斉昭	砲術	「新訳之砲書」
/ 6/23	伊達宗城	徳川斉昭	砲術	「与風此雷火銃」
/ 9/16	島津斉彬	徳川斉昭	情報	「別段風説書」
/10/頃	徳川斉昭	島津斉彬	不明	「珍書」
			船舶	「車船雛形」
嘉4/冬	徳川斉昭	伊達宗城	その他	「エルンスト」
嘉6/ 9/15	島津斉彬	伊達宗城	砲術	「イギリス琉球へ残置候小筒一挺」
/11/ 3	島津斉彬	伊達宗城	船舶	「車船雛形」
			砲術	「ボンベカノン台正図」

安1/ 1/ 3	島津斉彬	鍋島斉正	船舶	「大船ノ画図」
/ 1/ 4	伊達宗城	島津斉彬	情報	「風説書」
/ 3/ 3	島津斉彬	伊達宗城	船舶	「バツテラ」
/ 4/頃	松平慶永	島津斉彬	船舶	「(アメリカ船)雛形写」
	島津斉彬	徳川斉昭	砲術	「大砲雛形」
	徳川斉昭	島津斉彬	兵法	「調練之御密書」
	伊達宗城	島津斉彬	砲術	「大砲雛形」
/ 4/11	島津斉彬	松平慶永	砲術	「ボートホーイツスル之図」
/ 4/16	島津斉彬	徳川斉昭	砲術	「大砲雛形」
/ 6/頃	伊達宗城	島津斉彬	砲術	「ボード砲図」
/ 6/ 3	松平慶永	島津斉彬	不明	「遐邇貫珍」
安2/ 1/頃	島津斉彬	伊達宗城	技術	「エレキテル」
/12/頃	島津斉彬	松平慶永	兵法	「騎兵書」
安3/ 8/16	伊達宗城	徳川斉昭	情報	「靖海全書」
/10/26	伊達宗城	島津斉彬	情報	「風説書」
不明	鍋島斉正	伊達宗城	砲術	「セスセレル火術書」
			砲術	「サウサイー 砲術字書」
			技術	「スシルトホウウエル著 火薬製法説」
			兵法	「フオンブランドト 歩卒騎兵鉄砲三件書」
			砲術	「フエルドアルチルレリー 野戦砲術書」
			砲術	「銅製石火矢鋳立方之書」
	藤堂高猷	徳川斉昭	砲術	「ベキサンス・ボンベ・カノヲン」
	伊達宗城	徳川斉昭	砲術	「剣付筒折法」
			兵法	「歩卒陣立を記し候様…蘭書」

出典：『徳川斉昭・伊達宗城往復書翰集』、『斉彬公史料』第一巻～第四巻

名は蘭書貸借を通じた情報・知識の摂取を積極的に試みたと考えられる。

また、弘化三年、徳川斉昭の謹慎が解除されたことも、大きな要因である。斉昭の政治活動が一定の制限下から解放されたことで、有志大名間の蘭書貸借が恒常化している。

終期は、安政期に求められる。当該期は、長崎海軍伝習の開始に象徴されるように、列島規模の海防充備模索と西洋学問受容の潮流が生まれた時期である。例えば、島津斉彬は、この頃に蘭学修行を始めとする遊学制度の確立を模索していた⁹¹⁾。このことは、藩主層での蘭学受容から士分層での受容へと推移したことを意味している。

つまり、安政期に於ける蘭学交流の活発化と平易化によって、大名間での蘭書貸借の必要性が低下した、と評価できよう。

二 相手

斉昭・斉彬・伊達宗城の三者を中心とした、貸借関係が盛んである。これは依拠した史料に問題があるう。ただし、念頭に置くべきことは、彼らの立場の相違である。

当時、斉昭は水戸藩隠居、宗城は宇和島藩主、斉彬は薩摩藩世子である。彼らの交際は、大名が江戸城殿席などを通じて日常的に行う交流で培われたものではなく、自らが積極的に取り結んだ非公式な交流であった。

彼ら以外には、有馬頼永（久留米藩世子）・松平慶永（福井藩主）・鍋島斉正・藤堂高猷（津藩主）の名が見える。彼らについては、斉昭と宗城の間で交わされた人物評にて、「有志」と認定された人物たちである。⁽²²⁾つまり、表で挙げた蘭書貸借の事例は、「有志」の認定を受けた者の間に限って行われた、と考えられる。

貸借相手が極めて限定的であったことは、後述する、有志大名の性格に関わる査証である。

三 内容

貸借された蘭書は、総計七〇点である。それを内容別に分類すると、砲術二五点・情報一二点・兵書一点・船舶六点・技術三点・その他四点・不明九点、となる。

砲術書・兵書・船舶など、軍事技術に関する蘭書が六割を占める。このことは、かつて佐藤昌介氏が指摘した、「洋学の軍事科学化」を改めて査証する傾向である。⁽²³⁾

また、情報関係の蘭書が全体の二割弱を占めていることも、注目に値する。なかには、別段風説書と思しき書籍が六点確認できる。このことは、蘭書貸借と情報収集が同一のネットワークで展開していたことを物語っているよう。

第三章 蘭書貸借の周辺

ここでは、蘭書貸借に付随する諸問題、すなわち蘭書の入手・翻訳・拡散を検討する。

一 蘭書の入手

大名の海外情報入手については、用頼通詞の関与が指摘されている。⁽²⁴⁾通詞は、対外的接触が限定されていた当時の列島地域に於いて、海外情報に接触できる数少ない存在であった。有志大名は、彼らと積極的に交流し、情報収集を行った。

蘭書に関しても、長崎通詞は数少ない媒介者であった。例えば、【史料七】では、島津斉彬が天文台で和解された「海上砲術全書」を「極内分相頼」んで入手したとあり、

天文台通詞の関与が窺える。また、嘉永二年三月の伊達宗城の書翰には、「訳官榎林某も先日出府仕、蘭書相応持越申候、少々私儀も蔵得仕候含にて、当時専ら見合い最中に御坐候」とあり、通詞「榎林某」と蘭書の「見合い」を行っていることが判る。

ただ、有志大名の蘭書入手に関与するのは、通詞だけではなかった。

【史料一二】（嘉永二年五月頃カ）島津斉彬書翰⁽²⁶⁾

一蘭書目之儀、別紙奉差上候、外二も宜敷書物御座候へ共、高直にて余り無益ニ御座候間、乍残念買入不仕候、此義先日井戸對馬江も申談候処、来春よりは相当之处ニ相成候様、折角骨折可申との事
ニ御座候、御笑草ニ申上候

右は、斉彬が徳川斉昭に対し、蘭書の購入状況を報じた書翰である。ここで注目されるのは、斉彬と長崎奉行井戸覚弘が蘭書購入について、「申談」していることである。斉彬は輸入蘭書が「高直にて余り無益」であることに不満を述べ、これに井戸が「来春よりは相当之处」になるよう「折角骨折可申」との約束をしている。

この井戸の約束は、嘉永三（一八五〇）年のオランダ

船入津の際、果されている。

【史料一三】嘉永六年十月十五日付ドンケルⅡクルチウス覚え書添書⁽²⁷⁾

物議をかもすことになりかねない事情がもう一つあります。最近出版され、長崎に持ち込まれた前商館長レフィスソーン氏の著書『日本雑纂』に絡む懸念です。従来幕府はオランダ人を通じて毎年任意に書籍を購入し、搬入する権利を行使してきました。オランダ人は毎年将軍に提出する書籍目録を作成してきました。幕府は注文する書物の適不適を遠い日本で決定していたわけです。しかし三年前から日本人はこれが最善の方法ではないことに気づき、新しい規則を採用しました。彼らは突然私たちが書籍や地図を押収して、役人にその目録を作らせ、その目録から将軍が要求する書籍を選びました。没収した書籍には十分な賠償金を払いました。このようなわけで、レフィスソーン氏の著書もこの目録にあげられてしまったのです。事前に知らされなかったのです、私はこれを阻止することができませんでした。

右は、オランダ商館長クルチウスが東インド総督

A.J.Duynmaer van Twist に提出した、覚書の一部である。

クルチウスの言によると、従来、日本の蘭書輸入は、まずオランダ商館が書籍目録を作成・提出し、それに基づいて購入書籍が決定、注文される手順であった。しかし、「三年前」より手法が変更となり、オランダ商館の蘭書類が「押収」され、目録が作成され、選定された蘭書は「没収」の上で「賠償金」が支払われた、とある。ここにある「三年前」とは、嘉永三年のことである。

クルチウスの説明は、『日本雑纂』を目録化されたことへの弁明であるため、「押収」や「没収」という表現には、疑義を挿まざるを得ない。しかし、少なくとも、嘉永三年より長崎での蘭書輸入方法が変更されたことは事実とみてよいだろう。つまり、斉彬と井戸の約束が、ここに果されているのである。

斉彬と井戸の「申談」を、有志大名と長崎奉行の関係へと一般化できるか否かは、一先ず留保しておきたい。しかし、こうした有志大名からの要請が、長崎奉行によって実現をみた事実、注目に値しよう。

二 蘭書の翻訳

蘭書の入手後、最も問題となるのは和解、すなわち翻訳の問題である。当時の輸入蘭書は、漢訳本も多くあったが、オランダ語やイギリス語といった西洋言語そのままのものも少なくはなかった。原書のままでは、蘭書の利用には到底供し難く、その情報や知見を活かすためにも、和解は必須の作業であった。

しかし、当時の列島地域に於ける学問環境からすると、オランダ語を始めとする外国語を自在とする者は多くはなく、その水準も玉石混淆であった。

【史料一四】（月日不詳）伊達宗城書翰⁽²⁸⁾

蘭書二冊差上申候、此書ハ剣付筒折法、並、歩卒陣立を記し候様承り居候申候、実に写候者未熟して、誤字落文杯御座候程も難計、此段御宥恕奉願候、両様共相済候ハ、被相下度奉希候、何卒翻訳出来候者を手に入度と、夜白心懸居候儀御座候

右は、宗城が斉昭に対し、蘭書を貸与した際に添えられた書翰である。貸与する蘭書は誤植が多く、その原因は写本作成者の「未熟」にある、という。そのため、「翻訳出来候者」を入手したい、との希望を漏らしている。

このように、蘭書収集にあたつては、和解毒が特に競望された。【史料五】では、斉昭が「原本ハ下官ニ御座候へ共、和解毒ハ未所持不致候」を理由に、「和解毒御所持ニ候は、追々借覽致度御頼申候」と、斉彬に和解毒の借用を依頼していた。蘭書の原本を所有していても、和解毒の問題が障壁となり、それを即座に利用できるわけではなかった。和解毒の入手こそが、蘭書活用の喫緊の手段であつた。

有志大名のなかには、一早く最新の海外情報や西洋技術を得るべく、独自に翻訳の努力を行う者もあつた。例えば、佐賀藩では、長崎通詞榎林氏を登用し、彼らの語学力を大いに活用したという⁽³⁰⁾。また、薩摩藩では、広く蘭学者に協力を仰ぎ、蘭書の和解毒に当たらせた。

その一人が、伊東玄朴である。玄朴は、シーボルトに師事し、象先堂を開塾した蘭学者として高名で、佐賀藩の御側医などを務めた人物である⁽³⁰⁾。嘉永二年頃の斉彬書翰中に「煩鉄書未タ全備不仕候、肥前家来玄朴方江度々申遣へ共、いまた不残遣し候」とあり、斉彬が玄朴に「煩鉄書」の和解毒を依頼していることが判る。同書は、鑄鉄砲の製造方法を記した U.Huguenin 著「Het gietwezen in's

Ryks IJzer-geschutgieterij te Luik」1826（ロイク王立鑄鉄所での鑄造法）の訳書「煩鉄全書」とみられ、嘉永三年頃に成稿している。

また、別の斉彬書翰中に「小子訳文申付置候防海試説、未タ成就不仕候、如何いたし可然や、訳書為致候人は永庵ニ御座候」とあるように⁽³²⁾、長州藩典医である東条英庵にも和解毒を依頼していた⁽³³⁾。同書は、築城書として知られる N. Engelberts, J.M 著「Proeve eener verhandling over de kustverdediging」1839（海岸防禦に関する実例的論文）の訳書とみられる。

玄朴も英庵も、薩摩藩の関係者ではなく、他大名の家士であつた。それでも、斉彬は積極的に彼らの語学力を活用し、蘭書の和解毒に取り組ませたのである。

三 蘭書の拡散

ここでは、有志大名の間で蘭書が如何に拡散したのか、それを追跡しておく。

素材とするのは、「海上砲術全書」という蘭書である。同書は、一八三二年に J.N. Calen が著した、「Leidraad bij het onderrijs in de Zee-artillerie」（海上砲術教育に関する

指針)の和解本である。天保一四(一八四三)年、杉田立卿・箕作阮甫ら蕃書和解御用掛の面々によつて訳稿された。⁽³⁴⁾

拡散元は、斉彬である。【史料七】にて、斉彬は斉昭に対し、「海上砲術全書と申候ゼーアルチルレリー、天文台にて和解出来候品、極内分相頼、先月末手二入申候」と報じている。天文台から「極内分相頼」むことで入手したという。天文台には蕃書和解御用掛が設置されていたので、おそらく訳出に関係した人物から入手したと推測できる。入手は弘化二(一八四五)年九月、訳稿完成から僅か二年後である。

斉彬が入手した「海上砲術全書」は、まず有馬頼永に貸与された。

【史料一五】弘化二年一月七日島津斉彬書翰⁽³⁵⁾

ゼーアルチルレリー之儀は、当時少々外江も借遣
シ置候間、歸り次第可奉差上候、夫共御急ニも御座
候ハ、手元ニ在合之処可差上候、実は有馬筑後懇
望ニて借用致写候事ニ御座候

右は、斉昭からの借用依頼に対し、斉彬が応答した書翰である。「有馬筑後」こと頼永へ借用中のため、現況で

は貸与に応じ難い、とある。ここで注目されるのは、貸借の迅速さである。九月に斉彬が入手し、翌一〇月に斉昭へ報知しているが、一月には既に頼永へ貸与中となつた。頼永の借用は、斉昭同様に、斉彬からの申出があつた可能性が考えられる。ともあれ、和解本の入手後、直ぐさま拡散が始まつていることは注目に値する。

頼永は写本作成に相当の時間が必要だつたようで、同書は約一年後に斉彬へ返却された。そして、弘化三年一月、「最早有馬之方も相済候間、全部取揃差上申候間、御用之分御写ニ相成候様奉願候」と、斉彬から斉昭への貸与が行われた。⁽³⁶⁾

このようにして斉昭が入手・作成した「海上砲術全書」の写本は、次に宗城に貸与された。

【史料一六】嘉永二年三月一八日付伊達宗城書翰⁽³⁷⁾

扱又先日相伺候銃書、右ハ何レニ可有之哉申上候様
奉畏候、取持之者ハ承知不仕、海陸必要之銃書中、
第一之書と申事故、甚朝暮渴望被罷在候、何分御吟
味之上相伺候奉存候、ゼーアルチルレリー之訳書も
被為在候半、何卒拝借奉希候

斉昭は、この依頼に応じたようで、宗城からは「アル

チルレリー 訳書ハ御吟味可被成下旨難有奉存候」と、謝辞を伝える書翰が届けられている。⁽³⁸⁾

以上を、次の二点から整理しておきたい。

第一に、貸借を通じた拡散である。ここでは、 $\langle$ 天文台 $\rightarrow$ 斉彬 $\rightarrow$ 頼永の系と $\langle$ 天文台 $\rightarrow$ 斉彬 $\rightarrow$ 斉昭 $\rightarrow$ 宗城 $\rangle$ の系を確認することができた。一つの蘭書が、貸借を通じて、四者の手に拡散した。

第二に、拡散の速度である。天文台による訳稿完成から宗城の入手まで、約六年間での拡散が確認できた。六年という歳月は、頼永が写本作成に一年を費やしたことを考慮すれば、迅速と評じることができよう。蘭書は、貸借を通じて、急速に拡散したのである。

第四章 蘭書貸借の性格

ここでは、有志大名の蘭書貸借にみた関係性を、三つの観点から指摘する。

一 共有性

第一に、共有性の観点である。「共有」という視座にて

いては、園田英弘氏が優れた指摘をしている。園田氏は、幕末段階に於いて、「共有」世界という新たな社会動向が自然発生的に成長した、と提起した。それは、彼の言を借りれば、「幕府・諸藩を問わず、そして身分を問わず国事、より直接的には軍事を「共有」する」世界の誕生である。列島規模に及ぶ海防充備という共通目的達成のため、知識や情報、人材の自由な交流が発生しており、「共有」の有する公開性を基底に、挙国的海防体制が志向された、と述べた。⁽³⁹⁾

これまで検討したように、有志大名の蘭書貸借も、西洋知識を共有する行為であった。先に見た事例は、二者間で展開された関係が専らであった。ここでは、更に進んで、複数者間での共有関係に言及しておく。それは廻覧である。

【史料一七】安政元年四月一〇日付徳川斉昭書翰⁽⁴⁰⁾

御別紙薫誦、墨夷舶中ニ備置候銃砲雛形之事、承知いたし候、右ハ愚拙も入用故、わざわざ家来共差遣、為見拔候上、雛形為製候処、漸々昨夜始而一覽、実ハ早速国許右懸りへ遣度候処、折角之御属、外々と違候間、内密御廻し申上候、又々木形ニ為御取にて

ハ隙取候間、乍自由図面二も御座候ハ、近々御返し二致度、尤同志へ秘候訳ハ無之候間、越前・薩州等へ内密御見セ二いたし度、右両家へも無沙汰打過申候、宜御致声頼入存候也

右は、徳川斉昭が伊達宗城に対し、「銃砲雛形」の廻覽を依頼した書翰である。斉昭が作成した雛形や「図面」を、宗城だけではなく、「越前」こと松平慶永や「薩州」こと島津斉彬に拝見させたい、という。この意向は、宗城の仲介を以て、実現をみた。

【史料一八】安政元年四月一六日付島津斉彬書翰⁽⁴¹⁾

書添申上候、龍土より廻候大砲雛形差上申候、御覽
濟龍土江御返可被下候、且小子方にて写し候分龍土
江遣候間、同方より可差上候間、御写濟小子方江御
返却可被下候

右は、斉彬が斉昭に対し、雛形の件を報じた書翰である。「龍土」こと宗城より「大砲雛形」が「廻」つてきたので、それを斉昭に上呈していることが判る。また、斉昭には斉彬が作成した「写し」が廻っているはずなので、「御写濟」となれば斉彬方に返却されたい、という。つまり、雛形は〈斉昭↓宗城↓斉彬〉、写しは〈斉彬↓宗城↓斉

昭〉の流れで廻覧されていることが判る。

廻覧は、一対一の共有関係ではなく、複数間で同時に共有関係を機能させることができた。そうした意味に於いて、有志大名の共有関係は極めて緊密なものであった。

二 互助性

第二に、互助性である。

有志大名の蘭書貸借関係は、一方向的なものではなく、双方向的なものであったことは、先述したとおりである。実態はむしろ、この互助性が担保されなければ、機能しなかった面がある。

【史料一九】嘉永三年六月二三日付伊達宗城書翰⁽⁴²⁾

一、何そ有益書籍御手に被為入候ハ、拝見可被
仰付候間、何そ所蔵仕候ハ、差上候様奉承知候、
何分裨益之書も無御坐、其内砲台製造、鉄炮鑄造
坏之訳書ハ、追々出来仕、当時浄写中故、不遠呈
覽可仕と奉存候、西洋風之大小軍艦製造書、何分
手に入不申、よふく七種軍艦製造書位之儀に付、
右之類書何卒密々拝見奉希上度、原本二而も宜敷
御坐候、殿堂より御免被仰出候迄相待居候而ハ、

急速造立工面も難相附候得ハ、平時探索ハ仕置度奉存候、此儀ハ伏而奉渴望候

右は、宗城が斉昭に対し、蘭書の入手を報じた書翰である。冒頭に「何そ有益書籍御手に被為入候ハ、拝見可被 仰付候」との文言があることから、斉昭からの披見要求があつたことが窺える。宗城の報知は、斉昭の要請に応えたものであつた。

こうした互助要請は、別の事例でも確認することができる。例えば、【史料七】である。この書翰にて、斉彬が貸与の申出を行つていたことは、既に指摘したとおりである。この一件は、書翰の冒頭に「御書難有拝見仕候」とあり、斉昭書翰への謝辞を述べた上で、「且又蘭書之義恐入奉存候、秘候ニは無之候得共、御用立候程之書類所持不仕」と、蘭書を披見しないのは「秘」しているわけではなく、有用な書籍がないため、と弁明している⁽⁴³⁾。ここからは、斉昭が書翰を以て、強く蘭書の披見を要請していたことが窺える。

このように、宗城や斉彬に対し、斉昭は強く蘭書の披見を要請した。と同時に、彼らには、斉昭からの強烈なプレッシャーがあつた。これは、片務的な貸借では「有

志」の共有関係が担保できないため、より双方向的な互助性のある貸借関係を求めていた、といえよう。

三 秘匿性

第三に、秘匿性である。

有志大名は、蘭書貸借を徹底して秘匿した。このことは、これまで検討した史料からも散見できる。例えば、【史料七】では、斉彬が斉昭に貸与の申出を行つた際に、「他江は何卒御秘シ被下候様奉願候」と述べていた。【史料一〇】では、宗城が斉昭への返却に際し、「尤禁忌御秘本二付一切口外不仕様被仰付、是ハ乍恐御安慮奉願候、決而如何様之儀御座候共漏泄不仕事に御座候」と述べていた。こうした文言は、枚挙に遑がない。

では、なぜ有志大名は、蘭書を秘匿するのか。

【史料二〇】弘化三年一〇月五日付伊達宗城書翰⁽⁴⁴⁾

御別紙難有奉拝誦候、扱先頃内密申上候高四より御引上相成候蘭書拝借之儀、相整候や、未相済候ハ、書名申上候様、何と力御工夫被成下旨、重々御懇篤之御沙汰被成下、難有仕合奉存候、相願置候所、未タ御否無御座、尤書名ハ当夏入電覽候外存付無御座、

高四藏書目相下り候ハ、其内より相願度と存罷在候儀故、只今別段奉申上候様にハ難相成、兵書、大小銃製造打方・調練・製薬法・台場築立方・軍艦・輕舸・蒸氣船・海陸戰陣攻守之法、右等之部類二御座候ハ、何分渴望仕候儀に御座候得共、乍恐公辺二而禁忌二相成候間、諸家所持之者も秘藏仕、一切關外へ不出候間、御座候而も、固陋之愚生輩一閱候儀難出来、歎息之至、御憐察奉希候、前文相認候部類之蘭書、数々御秘藏可被為在と奉存候間、何卒御書目御密示奉希上候、愚僕相願置候官庫蘭書ハ、是非く工夫仕、願相叶候様仕度ト奉存居候、西洋夷人の胸中こそ固陋に而、嚴密可秘処、却而外国迄も緊要之書物抔相渡候段、本邦之人よりも胸中潤大に似候様奉存候、本邦中ハ一般之儀、有益之書にて、一人も得意の者御座候ハ、それ丈何等之時御為二相成可申儀、実に公私難了俗習ハ一洗有之度事に奉存候、崎陽注文之儀も杜絶仕候間、別而難得事二相成、知彼知己之工夫難相成、遺憾之極御座候

右は、宗城が斉昭に対し、「高四」こと高島秋帆が所藏した蘭書の処遇について、自身の見解を伝えた書翰であ

る。ここには、兵書や砲術書など、軍事技術に関する蘭書は「公辺二而禁忌二相成」という意識が垣間見え、ために多くの大名が蘭書を「秘藏」していると述べられている。

たしかに、近世の蘭書流通は、一定の制限化にあった。ただ、嘉永三年には、「以来者持渡之蘭書、不残之書名長崎奉行所江為書出、奉行所之ゆるしを受候分者、世上江流布致し不苦旨」と、蘭書流通が許可制の形式で認められた。さらに、大名については、「海岸守備等心得のため蘭書翻訳為致候向も有之候ハ、右書名相認、一応老中江届置、翻訳出来候上者、一部天文方役所江可被差出候」と、事実上の蘭書入手・流布が許可された⁽⁴⁵⁾。

しかし、有志大名の蘭書を秘匿する態度は、相変わらずであった。安政元（一八五四）年の書翰である【史料一七】には、「同志へ秘候訳ハ無之」という文言がみられる。このことは、逆説的に捉えると、「同志」以外には秘匿する態度であった。

有志大名の秘匿性は、当初は軍事技術に関する蘭書入手への禁忌意識に依るところであった。それが、次第に「同志」||「有志」の関係性として定着していったので

あろう。

結

以上、有志大名の蘭書貸借を検討した。ここでは、本稿での結論を整理すると共に、次稿への展望を以て、結びとしたい。

有志大名の蘭書貸借は、情報収集に始まり、借用依頼や写本作成を経て、返却を以て貸借の完結であった。その際には、積極的な情報交換や貸与申出といった、互助的な貸借関係が確認できた。しかし、その互助性は、相互の強烈的なプレッシャーを基に機能していた。

また、貸借の相手は非常に限定的であった。貸借関係を取り結ぶ相手は、「有志」と承認された大名に限られていた。このことを、有志大名の貸借関係が秘匿的であった、と評した。

園田氏の「共有」という観点から整理すれば、長崎奉行を通じた蘭書購入への関与、広く蘭学者を利用しての和解作業、有志大名間での迅速かつ広範な蘭書の拡散など、幕末段階には多彩な共有世界が形成されていた。し

かし、他方で、有志大名の貸借関係には、強烈的な互助性を求めるプレッシャーと、相互承認された者しか貸借に与れない秘匿性が付帯していた。このことは、共有世界の「非公開性」として、園田論へのアンチテーゼとなるう。

【註】

- (1) 河内八郎「徳川斉昭と伊達宗城」一〇一―一二一（『文学科論集』一〇〇―一一一・『人文学科論集』一二二―一二一、茨城大学人文学部紀要、一九七七―一九八八。後に河内編『徳川斉昭・伊達宗城往復書翰集』校倉書房、一九九三として集成）、芳即正「島津斉彬の海外情報源」（『斉彬公史料』月報2、鹿児島県維新史料編さん所、一九八二）、藤田正「有志大名の連携と伊達宗城」（『愛媛県歴史文化博物館研究紀要』八、二〇〇三）など。
- (2) 吉田昌彦「幕末期の内外情勢と情報」（『日本の近世6 情報と交通』中央公論社、一九九二。後に吉田「幕末における「王」と「覇者」ぺりかん社、一九九九に収載）。
- (3) 星山京子「徳川斉昭と「有志大名の情報ネットワーク」（『アジア文化研究』二五、一九九九。後に星山「徳川後期の攘夷思想と「西洋」風聞書房、二〇〇三へ収載）。
- (4) 岩下哲典『幕末日本の情報活動』雄山閣、二〇〇八改訂

増補、二〇〇〇初出など。

- (5) 岩下哲典『江戸の海外情報ネットワーク』吉川弘文館、二〇〇六。

- (6) 『斉彬公史料』第一巻、鹿児島県、一九八一、七三二頁。

- (7) 嘉永二年二月二五日付徳川斉昭宛島津斉彬書翰（『斉彬公史料』第一巻、一一六頁）。

- (8) 『斉彬公史料』第一巻、一〇八〜一〇九頁。

- (9) 『徳川斉昭・伊達宗城往復書翰集』一〇二頁。

- (10) 『斉彬公史料』第一巻、七二九頁。

- (11) 『斉彬公史料』第一巻、一一〇頁。

- (12) 『徳川斉昭・伊達宗城往復書翰集』七四〜七五頁。

- (13) 『斉彬公史料』第一巻、七二八頁。

- (14) 『徳川斉昭・伊達宗城往復書翰集』一六九頁。

- (15) 『徳川斉昭・伊達宗城往復書翰集』三二四頁。

- (16) 嘉永二年三月二五日付徳川斉昭宛伊達宗城書翰（『徳川斉昭・伊達宗城往復書翰集』二〇二頁）。

- (17) 嘉永五年三月二三日付徳川斉昭宛伊達宗城書翰（『徳川斉昭・伊達宗城往復書翰集』二八二頁）。

- (18) 弘化三年四月二三日付徳川斉昭宛島津斉彬書翰（『斉彬公史料』第一巻、七三四頁）。

- (19) 『徳川斉昭・伊達宗城往復書翰集』八〜九頁。

- (20) 『徳川斉昭・伊達宗城往復書翰集』一七三頁。

- (21) 齊藤純一「幕末期における洋学受容」平成二三年度佛教大学修士論文。

- (22) 「人物愚評之儀二付奉言上候条々」（『水戸藩史料』別記下、吉川弘文館、一九七〇復刻、一九一五初出、五九五〜五九七頁）。

- (23) 佐藤昌介『洋学史の研究』中央公論社、一九八〇。

- (24) 前掲、芳「島津斉彬の海外情報源」など。

- (25) 嘉永二年三月一七日付徳川斉昭宛伊達宗城書翰（『徳川斉昭・伊達宗城往復書翰集』一九八頁）。

- (26) 『斉彬公史料』第一巻、一〇八〜一〇九頁。

- (27) 『幕末出島末公開文書』新人物往来社、一九九二、六四頁。

- (28) 『徳川斉昭・伊達宗城往復書翰集』八九頁。

- (29) 木村直樹『〈通訳〉たちの幕末維新』吉川弘文館、二〇一

- (30) 玄朴の事蹟については、伊東栄『伊東玄朴伝』八潮書店、一九七八を参照。

- (31) 嘉永二年五月頃徳川斉昭宛島津斉彬書翰（『斉彬公史料』第一巻、一〇八頁）。

- (32) 嘉永六年九月二六日付徳川斉昭宛島津斉彬書翰（『斉彬公史料』第一巻、八九二〜八九三頁）。

- (33) 英庵の事蹟については、原平三「東条英庵」（『伝記』第

十卷第二・四・五号、一九四三）を参照。

(34) 『海上砲術全書』については、日蘭学会編『洋学史事典』
（雄松堂出版、一九八四、一五五～一五六頁）を参照。

(35) 『斉彬公史料』第一卷、七二九頁。

(36) 弘化三年二月二日付徳川斉昭宛島津斉彬書翰（『斉彬公史料』第一卷、七四四頁）。

(37) 『徳川斉昭・伊達宗城往復書翰集』一九九頁。

(38) 嘉永二年三月二五日付徳川斉昭宛伊達宗城書翰（『徳川
斉昭・伊達宗城往復書翰集』二〇二頁）。

(39) 園田英弘『西洋化の構造』思文閣出版、一九九三。

(40) 『徳川斉昭・伊達宗城往復書翰集』二九八～二九九頁。

(41) 『斉彬公史料』第三卷、鹿児島県、一九八三、八六六頁。

(42) 『徳川斉昭・伊達宗城往復書翰集』二五一頁。

(43) 弘化二年一〇月一二日付徳川斉昭宛島津斉彬書翰（『斉彬公史料』第一卷、七二七～七二八頁）。

(44) 『徳川斉昭・伊達宗城往復書翰集』三五頁。

(45) 嘉永三年九月二八日付若年寄申渡（『幕末御触書集成』
第五卷、岩波書店、一九九四、三〇七～三〇八頁）。